

心の美

未来を彩る

女子美術大学付属高等学校中学校

首都圏では、公立の中高一貫校が話題を集めています。中学受験の選択肢も私立と公立が並立。公私を分ける輪郭がかすれつつあります。「私立としてのアイデンティティ」を鮮やかに描き上げるために、各校は力を込めています。

そのような時勢にあって、塗料で厚く上塗りしなくとも、ビビッドに際立つ私学に心惹かれます。長きにわたり杉並の地で女子たちを迎える女子美術大学付属高等学校・中学校（以下「女子美」）。多数の私学と並び掲げても、その色彩を前に自ずと足が止まります。もちろん公立学校ににじまず、今、「私学とは何か」を深めるためにも欠かせない私学です。

今回、ムーヴが訪れたのは午後4時。生徒たちが素顔で語らう放課後。東高円寺駅から学校へ向かう閑静な住宅街では、大きな画材を「よいしょ」と肩に負う生徒たちとすれ違います。制服になじみがなくとも、明らかに女子美の生徒だと納得します。制服以上に、彼女たちの歩みに学校文化が映る。このような通学の列は、ほかの街では出会えないでしょう。

しっとり緑に覆われるキャンパスは、モダンな気配に、やはり何かが違うな？と感じます。門をくぐると中学高校生が集う南面へ…。2010年春に、生徒たちの笑顔を迎えた新しい校舎です。エントランスロビーは竹材を敷きつめたフローリング。アート空間が来校者の期待に応えます。これが中高生の作品？と驚く絵画の前を、カラフルな絵の具が染みたスモック姿でトコトコと急ぎ足の生徒たち。学校らしい健やかな活力が届きます。

新校舎には、私学でも群を抜く創作環境が整います。美術関係の教室が計9室。「デッサン室」・「デザイン室」など用途に特化。書道専用の一室も美の工房。他校では珍しいAPPLE製のコンピュータが並ぶ部屋は、クリエイティブなデジタルワークの場。随所に展示された生徒たちの作品を眺めながら校舎内を歩むと、希少な教育文化がますます目に立ちます。

美術学校としてはもちろん、私学として、さらに女子教育の場としても日本の先駆者として歴史に名を刻みました。建学は西暦1900年。明治33年です。学校教育の歴史をひもといてみましょう。一般の女子校さえも革命的だった時代だとおわかりですね。横山大観や岡倉天心が日本美術にエポックを拓こうする時代。欧州大陸で絵筆を握っていたのは、老齡のモネ、ルノワール、セザンヌ…。

女子のための美術学校は、常に無類な学舎として111年目を迎えました。

フランスのミュージアムでも、古都の神仏の前でも、女子美生の目は、おのおのが心にとまった造形を見つめています。なかには、美術館の装飾に心を奪われる生徒も。著名な作品を「確認」するだけでは貧しい。彼女たちは固定観念にとらわれず、ピュアな五感に導かれているのです。自然体の感性に促されているのです。

「風変わりな子」の集まりだからでしょうか？　いいえ、純朴で繊細な感性は、本来、子どもたちが持ち合わせているもの。知識を蓄えるだけに追われ、大人になるにつれ忘れてしまうのです。

でも、女子美生は、大切な心を守っています。彼女たちが養うのは「心の美」。その心の美は、生涯にわたり生活を彩るでしょう。

「描いてみたい、形作ってみたいけど、上手に表現できない。」女子美にはそんな生徒たちもたくさん。でも、女子美で伸びるうちに、少々不器用でも自分が表現できるんだ！と微笑みます。

○美術教育の恵み

「デザイナーとして美を組み立てたい」「絵本作家として夢を描きたい」。桜の季節に女子美の門をくぐった生徒たちが口々に語ります。12才にして、もう将来を見渡しているのですね。彼女たちにとって、女子美は、想いをかなえる場としてふさわしい。期待通りの学校だった。心も躍っているでしょう。世界にネットワークがつながる女子美。現在も美術のスペシャリストを世に送り出しています。

女子美は、才能に恵まれた子どもたちが腕を競う学校でしょうか？　美術の専門家だけを養成する学校でしょうか？

中学校では美術の授業は週に4時間。総合的な学習も美に染まるプログラムも並びます。でも、中学高等学校はあくまで普通科。教室での黒板は因数分解の数式も化学反応式も並びます。絵を描く余暇があったら英語と数学に専心するべきでしょうか？女子美は、今もその方針にありません。

では、美術教育にまい進する理由は？

○クリエイティブな道のり

「授業が指導案通りに進みません。生徒たちの反応が予測できないのです。」ある教科の先生のお話です。

生徒たちの奔放なひらめきが授業を彩っているからです。与えられた公式を黙々と使いこなすだけでは不満足。もちろん科学の法則は普遍的。決して公式に反発するような態度ではありません。でも、この式の方が美しい。この解法が楽しい。彼女たちは自然に心にわきおこるアイデアを表現しているのですね。知識に「感じている」のだと思います。指導案から逸れても、先生たちは彼女たちの発想を受け止めながら、やがて、美しい法則にたどり着くのです。

絵画でも彫刻でも、創作過程では対象物を見つめます。彼女たちは、われわれ大人が、気にもとめない草花や空の色も知っています。さらに、自分の心で解釈して表現するのです。これは、そのまま教科の学びの姿勢。数式でも古典文学でも、見つめる、感じる、表現する。女子美だけがなし得る学びのプロセスです。美術の経験が、教科の学びをクリエイティブに導く。女子美を語る上でのハイライトだと思います。

○カラフルな調和

世界的美術館に残る作品の大半は、アーティストがひとりで表現したもの。芸術作品は個人の表現です。女子美の生徒たちも、単独で自己表現に挑みます。時に思うような描写に至らず悩みます。根底から解決するのは自分。孤独な作業です。

「芸術家肌」の個人主義の集まりではありません。生徒たちは産みの苦しみを知っています。だから悩む仲間の姿にも共鳴します。個々のカラーの違いを知り、お互いが認め合っています。孤独な創作経験は、同時に他者理解共感にもつながっている。「相互理解」「協働」は、現在重んじられている教育テーマです。女子美は長年受け継いだ美術教育が解決しているのですね。

スペシャリストたちは、自己主張で終わらない。ほかのスペシャリストたちとのコラボレーションも紡ぐ。女子美の学校行事、美術の個人作品の展示もすばらしい。同時に、学校・クラス行事での「共作」もダイナミックな活気にあふれます。

個々のカラフルな色彩が主張しながらも、全体が調和するドラマチックな壁画を思わせます。

女子美の包容力

受験生の第一志望率 95%と伝えられています。さらに 4年生大学志望者の 90%以上が女子美術大学で進学し自らを極めます。理解共感者が集う幸福な私学です。女子美術大学の教育資産も共有します。教職員同士の連携も密です。女子美のカラーに覆われ、自分の未来を描きます。

ムーヴでは、「包容力」にあふれた学校だと伝えたい。女子美で得た糧は、あらゆるフィールドで生きるからです。女子たちのナイーブ、かつダイナミックな「心の美」はどの世界からも求められているのです。